

6. 大学図書館職員の新たな役割

(講義要旨)

竹内 比呂也

(千葉大学文学部教授, 附属図書館長, アカデミック・リンク・センター長)

大学図書館を取り巻く環境は大変に厳しいものになりつつある。例えば「現在、我が国の大学図書館は、大学を取り巻く社会の高度情報化の中で、大学における教育目的の多様化と研究活動に対する社会的要請の変化と高度化に対するため、その機能を拡充し、高機能化、効率化を図る必要に迫られている。また、大学全体の管理運営費が削減される状況の中で、人件費も含めた大学図書館運営費も例外ではなく、非常に厳しい状況にある」と科学技術・学術審議会の作業部会¹⁾においても指摘されている。また国立大学における「市場化テスト」の波は大学図書館に及び、国立大学においても全面委託によって運営される図書館が出現した。言うまでもなく私立大学図書館における図書館業務全面委託化は今や特別なものではなくなりつつある。「支援」しかしない職種は大学にとって必要不可欠なものとは見なされない時代が到来しつつあるとあってよいであろう。

河西は『情報化に対応しない図書館』や『学習に役立つ図書館』を明示的に指向しない大学図書館は、大学にとって単なる巨大書庫という不良債権になりかねない²⁾と記し、コレクションがあるというだけでは図書館の意義はもはや全くないことを示している。

このような大学図書館に対する見解は、別に日本においてのみ見られる訳ではない。米国で長年大学運営に関わってきた David Schulenburger は「大学のなかで『場所としての図書館が必要である』と言っているのは図書館員くらいのものである」と2009年3月に著者に語っている。またカリフォルニア大学の石松は「アメリカの大学では、ライブラリアンという職種が絶滅しようとしている³⁾」と述べており、これまで日本の多くの図書館関係者が理想としてきた、米国の大学図書館、あるいは図書館員のシステムに「黄昏」が訪れているように思われる。

これらの言説は、すでに確立された組織あるいは職種と考えられていたものであっても時代の変化によってその存在意義が問われなくなることがあるというごく当たり前の現象が、図書館あるいは図書館員にも押し寄せているということを示しているにすぎない。しかしながらここで留意しなければならないのは、記録された知識を、時代を超えて保存し、利用可能にするという図書館の普遍的かつ本質的な機能やそれを支える図書館員的な機能が不要になっているということではないという点である。今日、このような機能は、情報通信技術の持つ利便性の陰に隠れて不当に軽視されているようにも思われる。そのような状況にあって本質を守っていくためには、単にその機能の意義、あるいは普遍性を述べるだけではなく、時代の変化に合わせて外見を変えながらも本質を維持するしたたかさが求められる。大学図書館あるいは大学図書館員にとっては、現代の大学あるいは高等教育にとって必要な機能を提供しなければその存在意義を主張することはできない。「時代に即した新しい機能を開拓しつつ、その普遍的な機能を維持し続ける」ことが重要である。

この講義では、このような背景を理解した上で、以下のような観点から大学図書館員の問題を論じることを試みる。

1. 大学図書館員には何がもとめられているのか

国立大学でも図書館は市場化テストにさらされようとしているが、そのような環境のもとでの大学図書館職員には何がもとめられているのか。またアウトソーシングは、大学図書館(員)に何をもたらそうとしているのか。もし、大学図書館の将来が教育機能にあるとしたら、アウトソーシングの先に見えてくるのはなにか。真の専門職への道か、それとも大学崩壊への道か。

2. 主題専門職的図書館員は万能か

戦後日本の高等教育改革においては、アメリカがモデルとしてさまざまな変革がなされたが、日本の大学図書館員については、それが実現してはいない。また同時に、アメリカ型の図書館員養成を理想と考える人は多い。教育機能を強化した大学図書館を考えた場合、あるいは今日のような情報通信技術に依存する図書館を考えた場合、図書館員を構成するのは、アメリカ型の専門職図書館員＝主題専門職だけでよいのか。またアメリカ型の図書館員養成／職員モデルは真にグローバル・スタンダードと言えるのであろうか。

3. パブリックサービスとテクニカルサービスという組織は今日の大学図書館にふさわしいのか

多くの大学図書館で、パブリックサービスとテクニカルサービスという観点から組織の構築が行われているが、これはこれからの大学図書館の役割の実現、あるいは新しい役割を担おうとしている大学図書館員を組織する形態として相応しいものと言えるのか。もし相応しくないのであれば、どのような組織形態が望ましいのか。

4. 「図書館員の変革はすなわち図書館の変革である」という意識の下で図書館(員)はどのように変わるべきであるのか

大学図書館員と教育の接点は、これまでは「情報リテラシー教育」にあったが、情報リテラシー教育はまだ必要なのであろうか。その場合図書館員は「教員」にならなくてよいのだろうか。

5. 「ラーニング・コモンズ」を超えて大学図書館員ができること

教育機能の強化といえ、多くの関係者がアメリカで多く見られる「ラーニング・コモンズ」を思い浮かべるであろう。しかし、「ラーニング・コモンズ」は単なる「コモンズ」(共有地)なのだろうか。情報通信機器を配置し、アクティブ・ラーニングのための空間を整備することは「ラーニング・コモンズ」の第1歩ではあるが、それが目的なのではないはずである。そのことが本当に理解されているであろうか。「ラーニング・コモンズ」を外面だけを借りてきたも

のではなくするには何が必要なのか。そこで図書館職員は何をすべきなのか。

引用文献

- 1) 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）」（平成 21 年 7 月）
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1282987.htm)
- 2) 河西由美子「自律と協同の学びを支える図書館」山内祐平編著「学びの空間が大学を変える」東京、ポイックス、2010.
- 3) 石松久幸「今、アメリカの大学でライブラリアンと呼ばれる職業が絶滅しつつある」出版ニュース、2187, pp.6-10(2009)

大学図書館職員の新たな役割

竹内 比呂也

(千葉大学文学部教授, 附属図書館長,
アカデミック・リンク・センター長)

序論

大学図書館をとりまく厳しい環境

2

大学図書館をとりまく厳しい環境

- 現在、我が国の大学図書館は、大学を取り巻く社会の高度情報化の中で、大学における教育目的の多様化と研究活動に対する社会的要請の変化と高度化に対するため、その機能を拡充し、高機能化、効率化を図る必要(どうやって!?どのような方向で!?)に迫られている。また、大学全体の管理運営費が削減される状況の中で、人件費も含めた大学図書館運営費も例外ではなく、非常に厳しい状況にある。

3

大学図書館をとりまく厳しい環境

- 『アメリカの大学では、ライブラリアン(=主題専門職)という職種が絶滅しようとしている』⇒(図書館員は単なる書庫の門番としてしか残らない?特に専門教育における主題専門職の役割の低下?)
- 「個別の図書館システム」を必要としない、あるいは図書館を必要としないようなOPAC/図書館システム環境の出現⇒(認証のコントロールさえできれば後は利用者の思うがままに情報源を利用?)
- 「大学内で『場所としての図書館が必要である』と言っているのは図書館員くらいのものである」⇒(図書館は完全にバーチャル化?)

4

大学図書館をとりまく厳しい環境

- 「市場化テスト」の波、あるいは私立大学図書館における図書館業務全面委託化⇒(「支援」しかない職種は大学にとって必要不可欠なものとは見なされない?)
- 「『情報化に対応しない図書館』や『学習に役立つ図書館』を明示的に指向しない大学図書館は大学にとって単なる巨大書庫という不良債権(!)になりかねない。」

→どうすれば大学図書館と大学図書館員は生き残ることができるのか?

→大学図書館員には新しい役割があるのだろうか?

5

その1:背景

「研究」から「学習」へ

6

「研究」と大学図書館

- 「電子ジャーナル」の普及は、「図書館」の可視性を著しく低下させた
 - 非来館型利用の増加
 - ILLの劇的な減少、質的变化(REFORMの成果)
 - この現象は電子ジャーナルの購入経費が確保される限りは続く(しかしこれは怪しい???同時に図書そのものの電子化はいずれやってくる。)
- ⇒ 研究に関しては、「研究成果としての学術情報の流通のマネジメント」という方向しかなくなる
- ⇒ とはいえ学術情報流通の担い手が研究者に戻りつつある?(不要になりつつあるのは出版社と図書館か??)

7

研究から「学習」へのシフト

- 大学院重視の高等教育政策から『学士課程教育の構築に向けて』(中教審答申、平成20年12月)への転換
 - 学習活動の活性化が大学にとっての喫急の課題
 - 「学士力」: 課題解決能力の重視
 - 「単位制度の実質化」: 事前、事後学習の重視
 - 「教育方法の改善」
 - 「初年次における教育の配慮」
 - 日本の場合、これまでこれを十分にやってこなかったので、開拓の余地は大きい(新制大学の理念は60年経っても定着していない。例えば「単位制度の実質化」議論)

8

図書館という「場所」

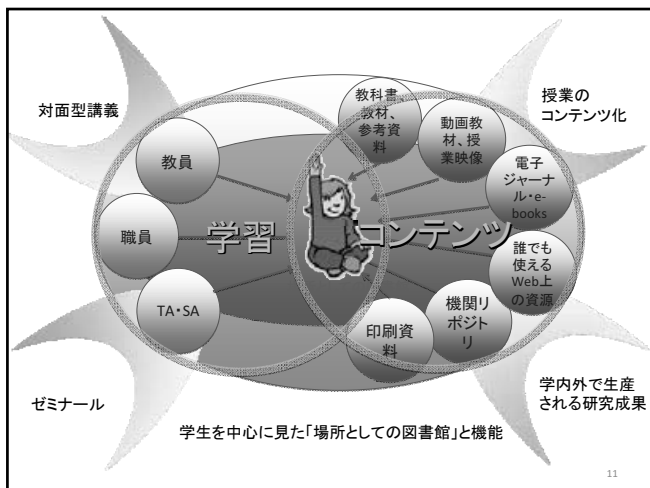
- ラーニング・コモンズ: 単に情報機器が並んでさえいればいい!?
- 「図書館は蜂の巣のような場所」-- Sarah Thomas
 - 人の活動を見る。自分の活動を見せる。それによって刺激を受ける。

9

“日本型”ラーニング・コモンズは、、、

- 単なる空間の提供であるケースが目立つ
 - グループ学習室
 - コンピュータ・クラスター
 - ラウンジ、カフェなどのくつろぎ空間
- 利用者のニーズには合致しているかもしれないが、そこで働く図書館員の存在(人的支援)はほとんど何も考えられていないように見える。
- 大学全体の中で図書館機能の再定義がなされないと意味を持たない。

10



11

コンピュータ資源は集客力!?

- コンピュータ資源はいつまで集客力の源たりうるか?
 - → いずれ誰もがコンピュータを持つようになると、単なる厄介者になる?
 - → その時、図書館にとって何が集客力になるのか?
- 人。資料がなくなり、建物がなくなっても、人によるサービスが他にない魅力的なものであれば、図書館員は生き残ることができる。

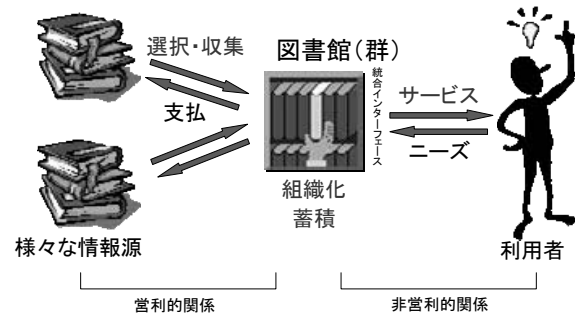
12

その2:まだまだ背景

「学習」のための図書館サービス: 回顧

13

図書館を中心にした 情報サービス理解の枠組み



14

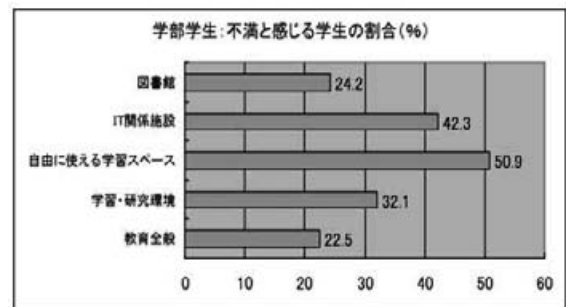
「学習」との関わりにおいてこのサービスモデルは まだ有効だろうか？

- *今の学生は、図書館を発見しているか？
- *今の学生は、図書館で何ができるかを知っているか？
- *今の学生は、図書館員に質問するということを知っているか？
- *今の学生は、図書館に満足しているか？

従来のモデルは有効であるように思われるが、新たなアプローチが必要。そもそも、このモデルにあてはまるようなサービスだけでよいのかという問題。

15

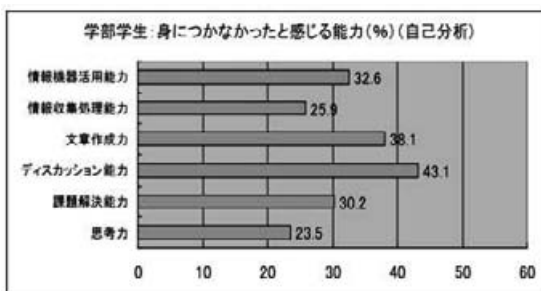
学生は満足しているか？



Source:「千葉大学の教育・研究に対する意識・満足度調査報告書」(平成19年9月)より平成18年度卒業生調査

16

学生は在学中にスキルを身につけているか？



Source:「千葉大学の教育・研究に対する意識・満足度調査報告書」(平成19年9月)より平成18年度卒業生調査

18

この結果から見ると

- 図書館はがんばってきたのは事実
- 図書館には不満がないと言いながら、「自由に使える学習スペース」に不満が多いのはどう考えればよいのか？
- 情報リテラシー能力の涵養という観点から見れば、「文章作成能力」「情報機器活用能力」などが今後の課題であることがわかる

学習をサポートする図書館

- 学習のサポートはこれまでも行われてこなかった訳ではない
 - 1960年代の岸本改革(東京大学附属図書館)
 - レファレンスルームの設置
 - リザーブ図書制度の導入

これらは成功したと言えるのだろうか? 多分言えない。なぜか?

その3 ケーススタディ

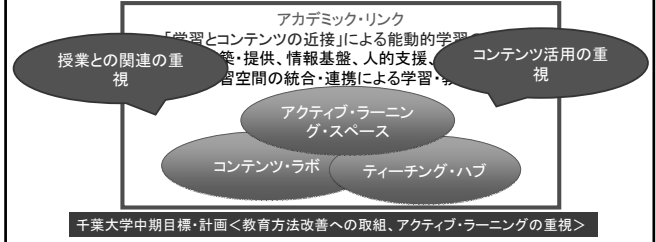
「アカデミック・リンク」という思想

千葉大学では、、、

- リエゾン・ライブラリアン・プロジェクト
「授業資料ナビ」(パスファインダー)
図書館資料と授業を結びつける
普遍コア科目を中心に69科目(2010年度)
- 総合メディアホール(仮称)構想(1990年代末)
図書館資源とコンピュータ資源のより密接な連携
→これはすでにあまり意味を持たない?

アカデミック・リンクによる千葉大学の教育改革

目的:「考える学生の創造」
「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ学生の育成



大学に対する社会的要請

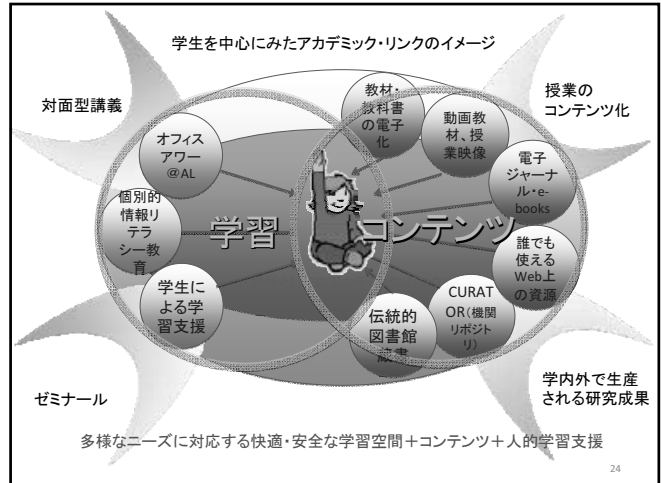
学生のニーズ

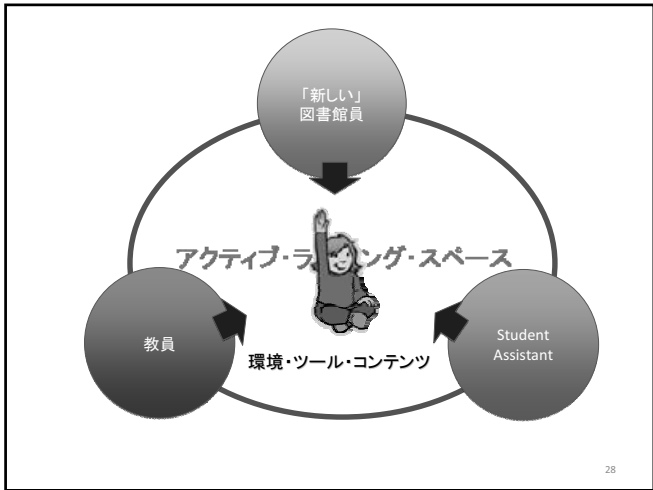
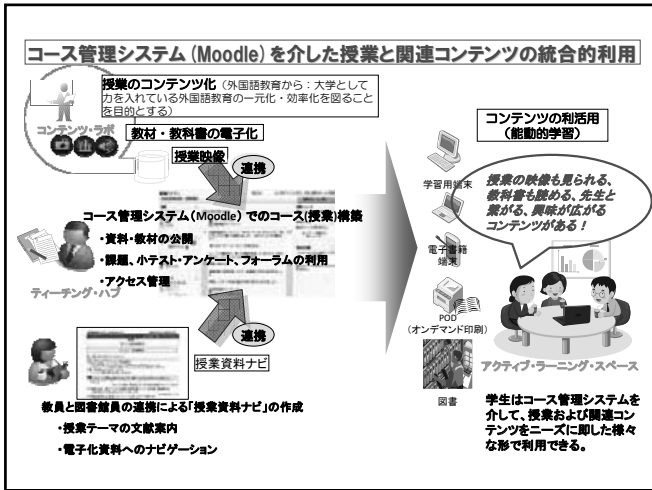
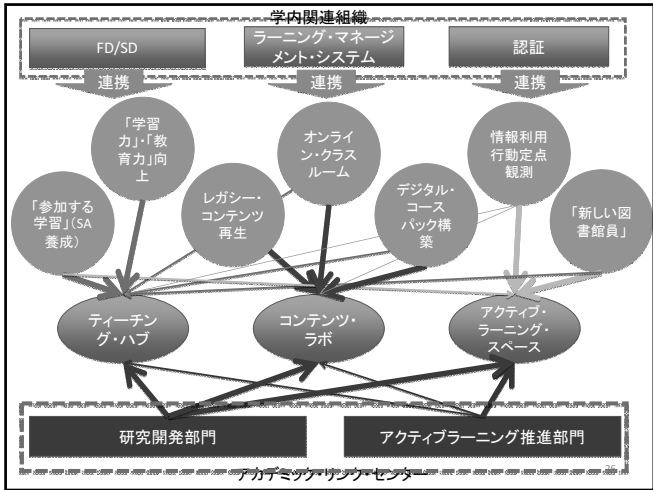
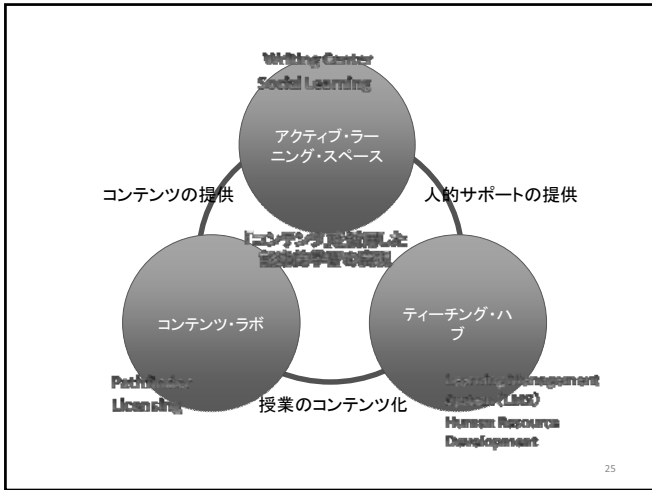
- 知識基盤社会、学習社会における市民の育成
- 高等教育のグローバル化の中での質の維持・向上
- 職業人としての基礎能力、創造的人材の育成
- 自由に使える学習スペース
- 文章作成力、ディスカッション能力、問題解決能力
- 英語によるコミュニケーション能力

『学芸資料教育の発展に向けて』(平成20年12月14日、中野実著) 『千葉大学の教育・研究に対する長期・遠景目標報告書』(平成21年度)

「学士課程教育の構築に向けて」、千葉大学中期目標・計画とアカデミック・リンク

「学士課程教育の構築に向けて」(中野実著)において千葉大学に求められている取組	千葉大学中期目標・計画	アカデミック・リンクにおける実践
『学士課程教育の構築に向けて』 ・学位の価値を高める観点から教育方法の革新・見直しを行い、質の向上を図る。	・授業時間外に学習する学生への学習支援の充実し、その活動に際してコンディショニングを高めるような対策を講ずる上での工夫を凝らすことにより、質の向上を図る。	・授業そのもののコンテンツ化、教材の電子化(教材・資料の電子化)によるオンライン授業の実現 ・アクティブ・ラーニングの推進 ・学生の創造性を引き出すための教育方法の革新
『教育方法の改善』 ・学位の価値を高める観点から教育方法の革新・見直しを行い、質の向上を図る。多様な教育方法が積極的に取り入れられる。	・学生が主体的に参加する授業の実現。主体的・探求的・協働的な教育方法の構築と実践 ・アクティブ・ラーニングの推進 ・科目や授業形式など多様な教育方法の導入。個別化、柔軟性を重視して学習の質を高めることにより、質の向上を図る。	・授業のコンテンツ化の推進 ・教材・資料の電子化 ・アクティブ・ラーニングの推進 ・学生の創造性を引き出すための教育方法の革新
『教育研究上の目的等に即して、情報連携的取組を積極的に取り入れ、教育方法の改善を図る。』	・学生に必要な資料の体系的整備を行うことにより、教材と連携して授業に活用し、個別化・柔軟性を重視して学習の質を高めることにより、質の向上を図る。	・授業と教材の連携による「授業資料ナビ」の構築 ・コンテンツ作成、配信のためのプラットフォーム構築 ・電子図書、オンラインリポート構築など、多様な形式でのコンテンツの構築 ・個別化・柔軟性を重視して学習の質を高めることにより、質の向上を図る。
『教材の電子化』 ・電子化による教材の共有と活用。教材の共有と活用を促進する。教材の共有と活用を促進する。	・教材の電子化による教材の共有と活用。教材の共有と活用を促進する。	・教材の電子化による教材の共有と活用。教材の共有と活用を促進する。





その4 ささやかな本論とまとめ

大学図書館員がこれから強調すべき新たな役割

29

学習サポートの方向性

- 「学生に望まれる学習サポート」はどのような方向にあるのか？→学習そのものへの関与
- 授業との密接な連携
 - 「授業資料ナビ」(千葉大学): 授業単位のパスファインダーの作成、教員と図書館の連携の基づくもの。
- 「一対多」ではなく「一対一」になるようなサービスの提供
 - 例えば、レポート執筆を支援するライティング・センター
 - これらの前提として、図書館員は匿名であってはいけないのではないか？
 - カウンターの中にとどまってはいけない。

30

「研究」との関わり

- 「機関リポジトリ」と「研究評価、分析」が残る。
 - ⇒研究成果発信のための「機関リポジトリ」
 - ⇒研究成果評価のための「研究評価・分析」
- いずれも「図書館にしかない情報」を「図書館情報学のスキル」によって処理するもの
- E-Researchに踏み込めるか？

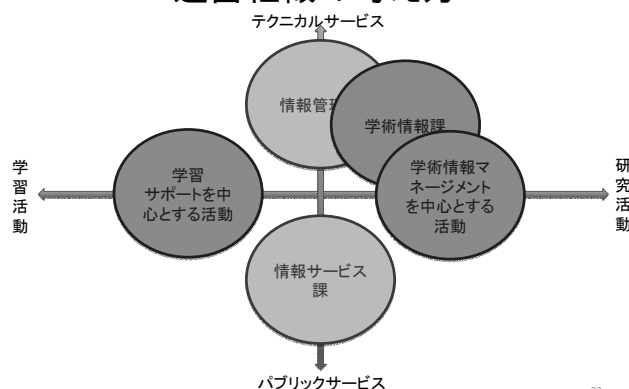
31

「資料提供／利用形態」に基づく サービス類型化からの脱却の必要性

- テクニカル・サービス／パブリック・サービスでは効率的なサービス展開は不可能
 - 利用者のタイプとニーズによる類型化しかできないなるだろう。
 - 研究者を対象とした業務
 - 学生を対象とした業務
 - それ以外に組織としての図書館の管理業務

32

運営組織の考え方



33

組織の形態

- 「専門職」組織は本質的にフラットでなければならない。
- 組織管理業務は本質的にフラットではできない。
- 従来の大学組織との整合性は？
 - 「専門職」部門は限りなく教員組織と近くなる

34

さて、当面の課題

- これまでやってきた業務は当面残ると考えざるを得ない(先細りとはいえ)
 - 今後の発展可能性がある新しい仕事はどんどん出てきている
 - マンパワーは限られている
- ⇒ プライオリティに基づく仕事の選別しかない

35

とりあえずのまとめ

- 図書館で行われる人的支援の中心は学生の能動的学習(あるいは学生のリサーチ)のサポートである
 - 単なる利用指導を超えて、ライティングセンター機能によるアカデミック・ライティングの指導→図書館員の教員化
 - 「ご用聞きライブラリアン」による多様な支援
 - リエゾン・ライブラリアン(教員との連携の強化)
 - 多様な人材のとりまとめ
 - 学習用コンテンツの構築＝ライセンス処理を含む

36

人的学習支援の考え方

- 大学において学習をサポートする人材は図書館員だけではない
 - 学生(TA,SA=ピア・サポート)
 - 教員
 - 伝統的な意味での図書館員とは異なるスキルを持つ職員

多様な人材が混在することによって新しい図書館はじめて機能する

37

librarianshipのコア・コンピタンス

(ALAによる)

- 1) 専門職の基礎
- 2) 情報資源
- 3) 記録された知識と情報の組織化
- 4) (情報通信)技術についての知識とスキル
- 5) レファレンスと利用者サービス
- 6) 研究
- 7) 継続教育と生涯学習
- 8) 管理と運営

38

人材の多様性の必要性

- コアとしての図書館情報学の基礎知識は当然必要。
- しかしそれしかないと多分困ることになる。
 - 多様な人材を備える必要性
 - アウトソーシングは「最低ライン」の仕事をこなすためにあるものであって、全面的なアウトソーシングは「大学」にとって自殺行為に等しい
 - しかし、同時にアウトソーシングしなければ、必要なサービスを提供するための人材の集約化はできないだろう

39

これからどうなる！？

- 図書館員の役割は当面広がると考えるべき
 - なぜなら、アメリカの大学図書館にくらべると、日本の大学図書館はたいしたことをしてこなかったので、新規開拓の余地があるから。その新規開拓が今日の大学にとっては重要。
- しかしながら、際限なく拡張することは不可能であり、あるターニングポイントで縮小の方向に動くことになる
 - なぜなら、図書館以外の場所で、これまで図書館がおこなってきたことの多くが実現してしまう可能性があるから。

40

これからどうなる！？

- 「全面的な図書館業務外部委託」により、短期的に経営上の問題が解決したかのように見えるが、いずれ大学全体を蝕み、大学の本質そのものを破壊する
- しかし、図書館における人材の集約化と高度化は必要であり、そのために周延的な業務の委託は必須
- 図書館員の役割として「何を残して何を捨てるか」を見極めることができる大学(図書館)と図書館員だけが生き残ることができる

41

まとめ

- 大学図書館員が持つべき「コアとなる知識・スキル」の再定義が必要
 - 大学図書館専門職とは何ができる人の集まりか
 - それをどのような形で養成するのか
 - 大学における大学図書館員の位置づけ

42

質問、コメントを大いに歓迎します！

43